

命を迎える

福井県立福井商業高等学校

山内

野乃子

私が中学校に入学した春、家族が増えた。父、母、四歳下の弟、それに十二歳も年が離れた弟。これが私の家族だ。

母のお腹に新しい命が宿ったことを聞いたのは、小学校六年生の時だった。夜ご飯の最中に突然、でも真剣に、大切そうに、母は私と弟に話をした。それは、お腹に赤ちゃんがいるということ。そして、まだ小さな小さな命だから、家族だけの秘密だということ。私はその秘密が、とても嬉しかった。

母が助産師ということもあり、私は小さい頃から、赤ちゃんがどのように成長していくのか、どのように生まれてくるのか、そしてその小さな命の尊さを本当によく教わってきた。家には、命の誕生に関する本が数えきれないほどあったし、母の助産師としての経験をよく聞かせてもらっていた。だから、命が育っていく過程や、それがどれだけ大変で神聖なことなのか、自分では人一倍よく分かっていると思っていた。しかし、実際にこんなに身近で、命が育っていく姿をみたのは初めてだった。

母は、お腹の命を大切に守りながら毎日を過ごしていた。家族みんなが新しい命の誕生を楽しみにしていた。私は毎日のように、

「赤ちゃんいつ生まれる？今日？」

を、繰り返した。母は幸せそうに、楽しみだね、と笑った。母のお腹はみるみるうちに大きくなっていき、みんなで母の身体を気遣い、助け合っていた。

しかし、妊娠七ヶ月目に入った頃、母が入院することになった。家から母がいなくなり、私と弟、そして仕事が忙しい父の三人だけになった。私と弟は何も聞かされていなかったが、そのとき母とお腹の命はとても危険な状態だったらしい。―切迫早産。早産の一手前の状態で、まだ生まれてくるには早すぎる赤ちゃんが、今にもでてきてしまいそうになることだ。母は、二十四時間絶対安静だった。私は父と弟と三人で、毎日のように母の病室を訪ねた。しかし、父は仕事が忙しく、病院に行けない日もあった。そんな日が続くと、私は母に会いたいと泣いた。その頃の私は、二ヶ月後に小学校の卒業式を控え、さらに春からは中学校という新しい環境へ変わることに不安が大きかった。その不安と、母が近くにいない不安が重なり、こんなに寂しい思いをするなら、新しい家族なんていらな、とまで思ってしまった。しかし、不安だったのは私だけではなかった。もちろん父も弟も不安だっただろう。そして、今改めてあの頃のことを思い返すと、助産師である母は特に、今の自分がどれだけ危険な状態かを分かっているのに、病院のベッドの上で毎日不安と闘

っていたのではないかと思う。そんな不安すぎる毎日が続く中で、母は私に一冊のノート
を渡してきた。母と私の交換ノートだった。それは、病院の売店に普通に売られている、
水色でキャラクターもののノートだった。しかし私にとっては、とても大切なノートだっ
た。母は、お腹の赤ちゃんのこと、病院のごはんのこと、家族のことなどを書いた。私は、
学校での出来事、習っていたバスケットとピアノのこと、友達と喧嘩をしたこと、いつも
なら家でごはんを食べながら話すようなことを、ノートにたくさん書いた。交換ノート
のおかげで私は不安だと感じる事が少なくなり、また家族が増えることを楽しみに、毎日
を過ごすことができた。

母の身体はなんとか安定し、退院することができた。母が家に帰ってきて、またいつも
どおりの生活に戻った。そして、家族みんなで赤ちゃんの名前を考えた。その結果、大切
な意味が込められていて、とても素敵な名前が決まった。

そのあと、まるで自分の名前が決まるのを待っていたかのように、赤ちゃんが生まれた。
夜だったので、父も弟も私も、立ち会うことができた。それは、今まで経験したことな
い感動だった。初めて分娩室に入った。初めて命が誕生する瞬間を自分の目でみた。生ま
れた赤ちゃんは、しわくちゃで変なおいがした。私は、まばたきをするのももったいな
いと思うくらい、生まれてきたばかりの赤ちゃんをみた。とても不思議な気持ちだった。

「赤ちゃん」だった弟が、今ではもう五歳になった。弟は、家族のムードメーカーで、
誰よりもよく喋り、泣き、笑う。日々、ものすごいスピードで成長していく。そんな弟を
みると、人の命というのは本当に神聖で、大切なものだと思ふことができる。

これからも私は、十二歳も年の離れた弟に教えてもらうことが、たくさんあるだろう。